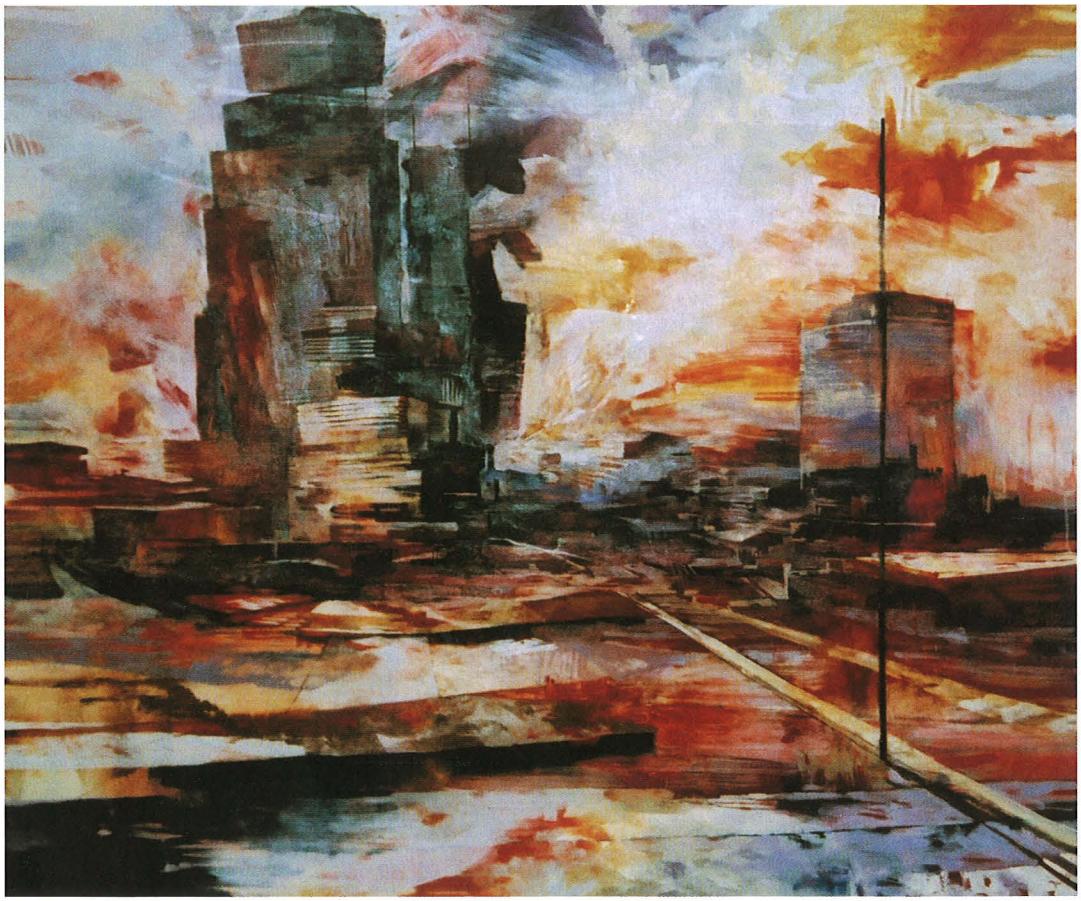
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2005年11月　NO.128



「overflowed sunrise」 土方　佐代香

〈もくじ〉

龍馬記念館の課題…… 森健志郎　2
キャメラのルーペを覗き続けて…… 羽方義昌　3
アーティストの地産地消 …… 北村真実　4～5
『ミラノ』にて …… 門田修充　6～7
「びっくり島の大冒険」での嬉しいビックリ！…… 田村千賀　8～9
司馬遼太郎さん逝って　もう十年 …… 窪内隆起 10～11
学芸員にとって企画展とは…… 安井敏夫　12
かるぽーと８・９月の事業のご報告…… 13
風俗歳時記・風伯 …… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

龍馬記念館の課題

森　健志郎

馴染みの散髪屋さん、Hさんの龍馬好きは、半端でない。ドアを開け、店内を覗いて椅子に座るまでの二、三メートルの間に、もう龍馬の話しが始まっている。椅子に座り態勢を整え、襟紙、タオルを首に巻き、カットクロスを着ける頃には、話しは一挙に佳境に入る。

例えばこんな具合だ。

「聞いてください、こうなんですよ。お盆で帰って来た息子、いえ、外国で音楽イベントの仕事をしている息子なんですがね。これまで顔を合わすと、意見の食い違いばかりだったんです。ところが、その息子が『竜馬がゆく』（司馬遼太郎著）を読みましてね。ええ、私がすすめたのですけれど。それがきっかけですわ。変わったんですよ。親子の会話が弾むようになったのですから」。

「それは、良かったじゃあないですか」。だが、こちらの相づちさえ、さえぎる勢いで話しは続き、ハサミさばきもリズミカルになってくるのである。

「息子がこう言うのですよ〝親父とこんな風に話が出来る時が来るとは思わんかった〟」。

鏡に映ったHさんのうれしげな表情に、こちらもなんだか楽しくなる。

タイミングよく洗髪係で待機していた奥さんが、話しに加わる。

鏡の中の奥さんは、大きな身振りでちょっと顔をしかめ、

「二人が朝から、やれ、今の日本はおかしい。龍馬の時代じゃ、何とかせにゃあ、議論沸騰なんですよ。雰囲気は悪くないんですけれど、〝お前はどう思う？〟突然こちらにふってきたりするのですから…」。

言いながら、しかし、まんざらでもないらしい。

私が、ここの館長に就任してから、Hさんの龍馬語りの口調はさらに一オクターブ上がったように思う。先日、理髪店が休みの月曜日、Hさんご夫婦が館に遊びに来られた。昼食をはさんでゆっくり二時間、龍馬を楽しんで帰られた。その日の夕食は、さぞ龍馬で盛り上がったことだろう。

就任してまだ一カ月ほどにしかならぬが、感じるのは龍馬ファンの熱の熱さである。

〝残暑の名残？〟いや、そんな生易しいものではない。

入館者に、任意で龍馬への思いを綴ってもらうコーナーがある。読ませていただくと子供から大人まで、それぞれの龍馬があって興味深い。

そう、彼は現在、大阪の中学校の先生である。十五年以上も前、桂浜に来たことがある。当時、大学卒業後の就職で悩んでいた。ヒントを貰いに、龍馬に会いに来たのだという。その甲斐あったのか、教員試験に受かった。すぐ、龍馬に今度は報告に来た。数年後、結婚しこの時は、二人で龍馬像の前に立った。その次は長男の生まれた時、家族は三人になった。そして、今回、長女誕生、四人でやって来た。桂浜訪問は五回目となった。

こんなケースが、少なくない。皆さん人生の節目にやって来る。龍馬像に挨拶し、水平線に続く海を見て、吹きぬける風を感じ、空を見上げる。我が人生と龍馬を重ね合わせてみる。そして、気分は龍馬なのである。

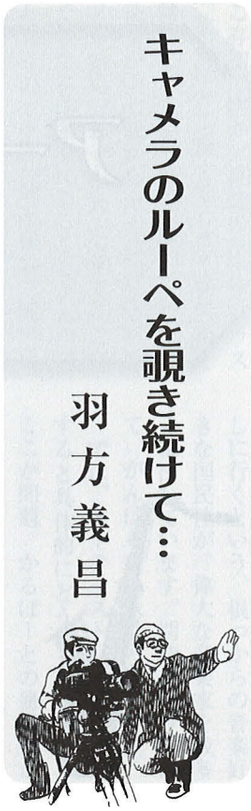
ただ一つ、残念なことがある。

年間およそ十三万人の龍馬記念館の入館者は、その約80パーセントが、県外組で占められることである。地元が、少ない。あまりに少ない。県外からのお客さんを案内してここに来た地元の人が、入り口まで来て、お客さんだけ中にいれてこう言う。「わしゃあ、外で待たせてもらうきに」。何回か、こんな光景を目撃した。地元の皆さんに繰り返し来ていただけるような龍馬記念館づくり。大きな課題に、ない知恵をしぼっているところである。

（もりけんしろう／高知県立坂本龍馬記念館館長）

キャメラのルーペを覗き続けて…

羽方　義昌



春霞の裏山に鶯は啼き、小川の岸辺では猫柳が芽吹き始め、れんげが春の訪れを告げる。このゆったりとした時間の流れへの焦燥感。故郷の見慣れた景色を後にしたのは、昭和三十五年の春でした。

ボストン一個で出て行く高知駅の見送りは母一人でした。早春のホームはまだ寒く、母の握った手のハンカチが震えていました。車窓には吉野川が蒼くゆったり流れ、向こう岸の桜も咲き始めていました。流れる車窓を眺めながら、無性に悲しくなったことを思い出します。

その年は安保闘争の最中で、社会党の浅沼委員長が右翼に刺され、樺美智子さんが国会議事堂前のデモで亡くなりました。野球では大洋が優勝した年です。

下宿は戸越銀座の三畳一間でした。二階の窓からは隣の庭が良く見え、新緑の木々の間には鯉のぼりが高く泳ぎ、子供を抱いた若夫婦の笑顔が木漏れ日に揺れていました。コッペパンやコロッケが五円の時代です。

プレス工場でバイトしながら映画館に通い、一年後に多摩芸術学園に入学し、松竹撮影所に入社したのは昭和三十八年の春でした。その頃撮影所の庭には桜の花が満開でした。撮影助手時代はまだ徒弟制度があり、先輩の言うことは絶対でした。

十数年の助手生活を送り、テレビを数本撮り、「天城越え」で映画デビューになります。その時の撮影現場を思い出します。

雨が降る下田署の娼婦ハナ（田中裕子）と少年建造（伊藤洋一）との別れのシーンです。

松竹撮影所の俳優館を下田署に見立て、ポイントに赤いカンナの花を植え、アスファルト道路には土が撒かれ、雨用のホースが準備されます。昭和十五年時代の衣装に着替えたエキストラを警察関係、報道関係、野次馬に仕分け待機します。キャメラもビニールでガードし、パラソルを立てます。今日で三回目の挑戦です。いつもピーカンで天気が曇ってくれません。役者の都合で今日が最後の挑戦です。やっと午後から日が翳り撮影開始。数本のホースから一斉に雨が噴き出します。深編笠のハナが巡査に引かれ、田島刑事（渡瀬恒彦）に付き添われて出て来ます。待ち構えている野次馬にどよめきが起こります。ハナは彼らの前に来ると立ち止まり、カッと頭を振って編笠を払い凝視します。キャメラから見るハナの素顔が壮絶までに美しく感じました。その顔に雨が叩きつけ、滝のように流れ落ちました。

「ハナ、建造を認める」

「建造、思わず何か口走りそうになる」

「ハナ、フッと菩薩の微笑で押さえる。そして、押送車に押し上げられながら、建造に何か言う」

「『サヨナラ』といったようである」

この四行のト書きを十一カット。ハナの最後のアップを同じサイズで三回、三倍のハイスピードで撮影。田中裕子の菩薩の微笑を印象付けました。次は地面に穴を掘り、キャメラを埋めて、その頭上をハナを乗せた車が走り去って行きます。それを見送る少年のアップ。何か言おうとする少年の口元がクシャと歪み、涙が雨の中で滲みます。ルーペを覗いて眼が熱くなり、すぐに顔が上げられなかったことを今でも覚えています。このカットが終わった時は、もう辺りは暗くなっていました。

このように撮影現場は与えられた予算と時間との戦いです。その中でキャメラマンは映った映像に全責任を持ちます。ワンカット、ワンカットの積み重ねが一本の作品となり、人間の出会いと別れ、喜びと悲しみが描かれてゆきます。今の現場は撮影所で和気藹々と作ってきたスタッフも少なくなり、フリーのスタッフが多くなり、若者の気質も変わり、実力よりも自己主張が強くなりました。

これからも見た人が感動し、記憶に残るような映像を撮り続けることができればと思っています。この年でやっと撮影が面白くなってきました。

今でも高知駅の母との別れがいつも残像として浮かび、遠くによさこい祭りのお囃子が聞こえてきます。いつかよさこい祭りを映画にできないものかと考える今日この頃です。

（はかたよしまさ／撮影監督）

アーティストの地産地消

北村真実

私は、高知大学でクラシック音楽を中心に学びながら、サークルでジャズバンドに参加し、その両方の素晴らしさを学びました。技術を極めてより美しく細やかに奏でるクラシックの魅力にも、また単語や文法を覚えて自由に会話するように演奏するジャズの魅力にもとりつかれたのでした。

今でも日々新しい発見があり、楽しく勉強できるというありがたい状況を享受しています。最近考えさせられることの一つに、「即興演奏をする時に、その流れの行き先を見据えておく」という事柄があります。しっかりとそれを意識することで、より自由に、よりまとまりのある流れのよいフレーズを作り出すことができるのです。このことは、当然クラシック音楽でも大切なことだし、ほかの事柄にもダブることが多々あるのです。

そのダブって感じることの一つに、今年から始まったかるぽーとの「アーティストバンク制度」があります。

その制度とは、高知で活動しているアーティスト（表現者）に登録してもらって（今年は音楽・舞踊・演劇に限定）、公の機関である「かるぽーと」が、「活動の場が欲しい」アーティストと依頼者を繋ぐパイプ役になるというものです。今までイベント等で、「地元アーティストに依頼をしたいけれど、どこに頼めばいいか分からない」というご意見を数多く聞いてきました。つてを頼るほかに方法がなかったのです。一方、アーティストは、自主公演を企画しようとするならば、労力も、資金もかなりつぎ込まなくてはいけなくて、表現内容の追求は、並行作業としては、極めて困難なことです。よほど経済的に又は体力的に余裕がないと実現しません。

かるぽーとが開館三年を経て、館の独自の方向性の一つに、「地元アーティストに光をあてる」というテーマを取り上げたことは、全国的に見ても、非常に画期的なことだと思います。

ところで、アーティストは、芸術家という意味ですが、厳しい見方をすれば、登録者全員が真の芸術家というわけではありません。きっと、

「かるぽーとは、世界的レヴェルのアーティストを呼ぶだけでいい」とお考えの方もいらっしゃると思います。けれど、それだけで、本当にいいのでしょうか。

一流のアートを鑑賞することも大切なことだけれども、私は、地元のアーティストが成長していくことも大切なことだと思っています。だから、この制度が、今の時点で不完全なものであっても、高知県の芸術文化のレヴェルの向上に、必ずや貢献するものだと思うのです。そこを見据えておきさえすれば、これから起こるであろう紆余曲折を乗り越えて、この制度はなくてはならないものになっていくはずです。

昨年メジャーデビューしたシンガーソングライターの矢野絢子さんをご存知ですか。高知のライブハウス「歌小屋の二階」でのライブ活動を続けながら、全国で活躍しています。彼女が十七歳から全くの独学でピアノを始め、わずか六、七年でここまできたのは環境によることが大きいと思うのです。「歌小屋の二階」に出演しているメンバーは、殆どが毎週ライブ活動を続けていて、そのライブを仲間が真剣に聴いているのです。その真剣さは、メニューにあるアルコールを注文するのも躊躇してしまうほどです。そんな環境の中で、絢子さんは毎週新曲を発表してきました。だから、すでに、何百曲と持ち曲があるのです。そして、絢子さん以外にも素晴らしいミュージシャンが育っています。

さて、アーティストバンクをきっかけに一人でも多くの県民の皆様が地元アーティストに、またその成長に関心を持っていただき、あるときは野次をとばしながらも温かく見守ってくださるような環境が広がっていけば、つまり、「歌小屋の二階」のような環境が広がっていけば、確実に高知県の文化は向上するのではないでしょうか。

例えば、イタリア。昔から、食事をがまんしてでも新作オペラの台本を買い、しっかり予習してから鑑賞しに行くという、根っからの音楽好きな国民性が、偉大な音楽家を数多く輩出しています。期待をかけられて、がんばらない人はいないはず。

では、アーティストバンクに登録すると具体的にどうなるの…？と、ここが問題。かるぽーとの冊子やホームページ上で一般に公開されるので、公演依頼の参考にしていただいたり、アーティスト同士の交流に活用したりすることができます。また、今後かるぽーと主催の事業としては、二カ月に一回程度、小ホール公演（アーティストバンク登録者のうち、希望者の中から選考の上、決定）を開催することが決まっています（一回目は十月二十日）。でも、かるぽーとの公演だけでは、限りがあります。

アーティストバンクプログラム vol.1

高知市文化プラザ活性化事業

県内で活躍するアーティストによるシリーズプログラム。公演によるアーティストバンク小ホール公演第1弾！3回ほど1名によるライブステージをお楽しみください。

Live Palette

◆ Trio approach（トリオ アプローチ）◆

数少ないチェロとコントラバスという低音の組み合わせに、さらにチェンバロという変わり楽器。新鮮軽やかでしっとり重厚なクラシックのサウンドをお楽しみください。
チェロ：須賀千浪、コントラバス：北村希代、
チェンバロ・ピアノ：澤田真苗
（プログラム）
テレマンのトリオソナタ、ロッシーニのデュオ etc…

◆ 直日焼（じかびやき）◆

前衛舞踊家の中山廣一と打楽器奏者の大久保日和によるセッションデュオ。息の合ったかけあいや、スリリングな挑発のしあい等、即興をベースにした緊張感あふれるセッションの妙味を見せつつ、起承転結のはっきりしたドラマ性豊かな世界を現出する。

◆ エルスール ◆

運命の糸に引き寄せられ、2001年秋に結成。クラシック音楽をベースに利根常昭氏のもと、ジャズ理論を学び、ジャンルをこえて独自のアレンジで県内外で演奏活動を行っている。海外のオーケストラとも多数共演しているフルートの安藤千鶴、国際コンクール一人のジャズ・ヴァイオリン・チャレンジャーの田代美和、高知の音楽界の向上発展に身を投じているピアニストの北村真実、南下でただ一人のプロコントラバス奏者の北村希代の女性4人組によるハーモニーをお楽しみください。

◆ 大目　真壱 ◆

2000年より高知在住。ケーナ・オカリナ教室の講師を務めながら、東京・高知を中心に演奏活動を展開中。

10月20日（木）開場 18:30 開演 19:00　高知市文化プラザ小ホール

入場料：全席自由1,500円（身障者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者とその介護者1名は1,050円）
主　催：財団法人高知市文化振興事業団　　助成：財団法人地域創造
後　援：高知新聞社／RKC高知放送／NHK高知放送／KUTVテレビ高知／KSSさんさんテレビ
お問い合わせ：088-883-5071／電話予約：088-883-5073
■前売券販売所
高知市文化プラザミュージアムショップ／高額プレイガイド／高知大丸プレイガイド
高知県民文化ホール／高知県立美術館ミュージアムショップ
※本公演は、昨年度に実施された「高知市文化プラザ活性化計画」に基づき募集した「アーティストバンク」登録者による「小ホール公演」です。

宝くじは 夢かき集く チカラ持ち。
宝くじは、広く社会に役立てられています。

そこで、お願いです。ホール、施設、学校、病院、ホテルなど公演可能な場所の関係者の皆様、ぜひ、このアーティストバンク制度をご利用いただき、地元アーティストに表現の機会を与えていただきたい。一回の公演のために注ぐエネルギーは、相当な量が必要です。同じプログラムを繰り返すことで、確実にレヴェルが上がるし、経済的にもより安定します。高知で活動しているアーティストの殆どは、生活のために、自分の専門分野外のアルバイトを余儀なく強いられます。

贅沢はしなくてもいいから、自分の道を極めていきたいと考えている地元アーティストを見守っていただきたい。アーティストバンクから派生するそんな温かな波が、地元アーティストをさらに真摯に芸術の追求に向かわせていくと思います。

最後に、この制度ができたのは、地元アーティストを応援しようという個人や会社がこの高知で少しずつ増えてきた延長上にあるということを、付け加えておきます。（本当にありがたいことです！）

さあ、スタートしたばかりのこの制度、今後、体制を徐々に整えながら、どのように高知の文化に影響を与えていくのでしょうか…。とっても楽しみです。

きたむらまなみ／ピアニスト・
高知県立丸の内高等学校音楽科
及び高知福祉専門学校時間講師
・音の広場「カプリース」主宰

『ミラノ』にて

門田修充

この数年、スペイン・カナダ・イタリア等で展覧会を催す機会を得た。そのため、僕は、僕の『クラゲ』や『空虚』を伴って、出かけて行くこととなった。

特にヨーロッパの町では、どんな小さな町でも、その町固有の空気というか、顔というか、僕たちの思いも及ばない、その町の歴史の襞とでもいうようなものに、圧倒された。

そこでは、歴史とは人間の作り上げた幻想の跡形ではあるとしても、人間の生きた証そのものであるのだと実感させられた。

そして、それらの町は、歴史が歴史として、過去に葬りさられることなく、現代とほとんど違和感なく、共に存ることによって、そのことが、むしろ、より深みと奥行きのある町の様相を呈する結果となっていた。

それは、取りも直さず、そこに住む人々の豊かな精神生活を支えている基にもなっているのではないかと考えられた。

二〇〇四年五月、個展のためミラノ（シューベルト画廊）に行くこととなった。

ミラノは、ドゥオモを中心に広がったような町である。

ドゥオモは、その建物の大きさに見合うだけの広場を前に、これぞゴシック建築だと言わんばかりに、荘厳にして壮大、秀麗な135本もの尖塔が異彩を放って、天高く聳え立っている。そして、それは、今日も、なお日々、人々の精神生活の支柱として、存在し続けている。

ドゥオモの周りを、いわゆる歴史的な古い建築群が、幾重にも取り囲むように町がつくられている。

そんな町の大通りには、古い建築物にもかかわらず、最新流行のファッションをリードする有名ブランドの店が、軒を連ねて入っている。

センス良く着飾った人々が、初夏の陽光を浴びて、華やいだ雰囲気に溢れている。

車や電車が引っ切り無しに、騒音を撒き散らしながら通り過ぎて行く。

真に、現代の都市の喧噪の中にある。

そんな通りから、一歩、脇道に逸れると、そこは、もう中世と見紛うようなたたずまいとなる。

一瞬にして、静寂の町に変貌する。

色んな思いが、何回、いや何千、何万回となく、行き交ったであろう少しめり込み、つるつるに黒く鈍い光を放っている石畳の道。

見上げても、ほとんど、空が見えないほどに視界を遮る、高く、広く、曲がりくねった石の壁が、人々の苦悩の痕跡を厚く、塗り込めたように、少しくすんで続いている。

そんな、喧噪と静寂の家並みを縫うように、だらだら坂を進んで行くと、いつの間にか、ミケランジェロの『ピエタ』や、ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』に出合うこととなる。

この現代と過去とが、アラベスクのように豊かな色彩で、織り上げられた町に、僕は軽く、心地よい眩暈を覚えた、と同時に、何か得体の知れない奥深さ、あるいは、この町特有の気配とでも呼べるような空気を感じた。

ミラノの空気に少し浸りながら、シューベルト画廊で、個展の展示作業を終え、僕は一人、作品を前にした時、僕たち自身の町について考えない訳にはいかなかった。

一九四五年、その時、僕たちの町の過去は、「あっ」という間に、雪崩の下に消滅してしまった。

そして、その上に新しく、自由とか、民主主義とか、科学的とか、合理主義等々という美名の営利主義、効率主義が飛び込んで来ることとなった。

ミラノのシューベルト画廊にて

幸か、不幸か、僕たちの家は、あるいは町は、嘗て（今も、ほとんど変わりないが）、木と紙と少しの土で出来ていた。「火事と喧嘩は江戸の華」と言われたように、人災や天災等々で、それは、いつも破壊と再生とを繰り返すという、実に身軽な家の有様で、歴史を刻んできた。

そのことが、この時も僕たちの町の再生を、素早く為し遂げる基となった。

それは、また、無分別に、新しくすべてを受け入れてしまうことにもなった。

真っ白な雪の上に、あたかもスケッチでも描くかのように、すべての過去を抹殺し、あるいは、過去から解き放たれ、科学的合理主義の名の許、だが、実体は、ほとんど無秩序に建物を造り続けた。

どんな山でも、海でも、森でもその土地の特質や歴史など、おかまいなしに、パチンコ店とスーパーが、町に君臨するように建ち、夜ともなれば、花火のようなネオンサインが、闇を蹴散らして、点滅している（夜の闇の中にしか生きられない虫たちは、いったい何処へ行ったのだろうか）。それらを取り囲むように、ペラペラのプラスチックで出来た新興住宅が、点在していく。

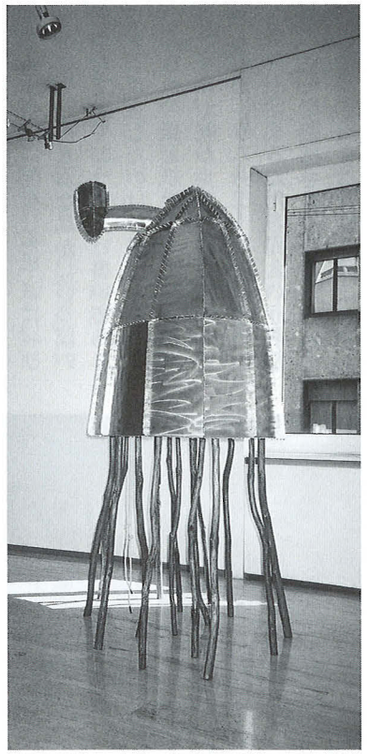
古い家並みも少しは残っている。しかし、歴史を感じさせる、あるいは、その町の顔というには、いかにも見窄らしい家が、ほんの一握り、その片隅に、ひっそりと追い遣られて建っている。

何時の頃からか、どんな町にでもいた精霊たちまでもが、夜の闇とともに何処かへ行ってしまった。

彼等こそが、町の空気をつくり出していたのではないだろうか。

町の至る処にいた彼等から、人々は、多くのことを学び、彼等のことを多く学んだ。悪戯好きもいれば、僕たちを助けてくれもした。そうやって、人々は彼たちと共生していた。

そんな、精霊が住む町では、そのため、人間の都合だけではなく、彼等の都合も聞きながら、その町独自の歴史を紡いできた。



そして、空っぽの肉体に－No.3

彼等の居なくなった今、僕たちは、僕たちの都合だけで、ほとんど短絡的に、と言っていいほど、効率とか、利益とかのみを考え、町はつくられることとなった。

そうして、薄っぺらで、何処を見ても、皆、同じような顔の、同じような空気をまとった町が、アメーバーのように、増殖することとなった。

町と同様、僕たち自身の顔も、また、定かでなくなっていく。そうして、僕たちは、クラゲのように、ふわふわと漂い、浮いているよりほか、為す術もなくなってしまった。

（かどたおさみつ／土佐高等学校教諭）

高知市文化体験プログラム　演劇ワークショップ

「びっくり島の大冒険」での嬉しいビックリ！

田村千賀

近年、何かと子供たちに関する話題が聞こえてきます。学級崩壊、児童虐待、学力低下、コミュニケーション力や表現力の不足など胸の痛い話ばかりです。日頃、子供たちとミュージカルを作っているのですが、他の人と違ったことをすることや一定以上の人数の中で自分の話をすることは、大多数の子供たちにとって、非常にハードルの高いことなんだと感じる場面があります。そんな時は、子供たちに「この部分は自分たちで作ってみて」と演技や振り付けなどを子供たちに任せてみます。何人かは何か思い付くのですが、それをやってみる前に必ず周りの様子を伺います。その時の目の動きといったら、それはいきいきと輝いてすばしっこいのです。でも思い付いた演技をやっている人がいない場合は、せっかくのアイデアをそっと心の引き出しにしまい込んでしまいます。そのたびに、どうやったら子供たちの豊かな発想を引き出すことができるのか…、本来の子供の輝きに出合いたいとお腹の底がもぞもぞとうずき、考え込みます。

子供たちは、周りの状況を感じ取る優秀なアンテナを持っています。感じる能力＝「感性」です。感性のアンテナをフルに使って感じたものを外に表す＝「表現」の時点でブレーキが掛かることがよくあります。きっとそれには理由があるからなんだろうと考えます。例えば、一人違うことを言うとみんなにどう思われるだろうという不安から先生や友達に気を使ったり、上手にやらなきゃというプレッシャーがあったり、何となく言いにくい雰囲気など。子供たちにもそんな環境があるのではないでしょうか。しかし、それらは実は私たち大人が知らず知らずのうちに作っているのかもしれません。

「ドラマ」には、そんなアゲンストな環境をほぐして豊かな自己表現につなげていく演劇活動の方法があります。大学時代に学んだ表現教育の必要性を今こそ感じ、卒業後に体得したことを総合してこの夏企画したのが、「びっくり島の大冒険」です。このお話には、台本がありません。まず事前に配布した手紙に、「びっくり島ってどんな島か、いっぱい想像して来てね」とだけ書いてあります。用意したのは、段ボールといろんな色の紙と紙テープだけ。よさこい祭りが終わって、夏休みもあと少しとなった八月二十五日、子供たちは何が始まるんだろうという期待と不安と緊張感を日焼けしたほっぺたにキラキラさせながら集まりました。

そして、最初はコミュニケーションゲーム。ここでは楽しいことをやるんだと感じてもらうために、いろんなゲームをします。わいわいやっていくうちに何となくある緊張感は消えていきます。そして、次は思い付いたことは何をやってもいい（ただし、みんなが困ること以外なら）という安心を感じてもらいます。これもゲームを通してです。「大丈夫よ～。安心して」と言葉で言うより実体験があるとないとでは安心の度合いは大違いです。

そして、自分から積極的に動ける心の環境をつくります。表現することはみんな違って当たり前であること、お互いの表現を認め合うこと。そこに信頼関係が生まれます。すべてゲームを通してやっていきます。仕掛ける側には、いろんな意図があるのですが、子供たちはそんなこと一切関係なく、めちゃくちゃ楽しい一時を過ごします。表現することは楽しいこと、これが始めの一歩として大切であると感じます。

二日間合計八時間のうち四時間をこのゲームに費やしました。その後

二班に分かれて、みんなで考えてきたびっくり島について話します。「びっくり島ってどんな島なの？　どうしてビックリなの？」私の問い掛けに、子供たちはひっきりなしに想像してきたことを話します。時々、「ちょっと待って」と言いながら、話を整理するのが大変なほどです。そして、出てきた話を基に、まずセット作り。みんな部屋いっぱいに思い思いのびっくり島のパーツを作っていきました。二つの班の間には一枚の黒幕が引かれていて、お互いの島のことは後のお楽しみです。

そしてできたセットの中で、配役を決めて芝居作りのスタートです。これもすべて質問形式で。私たち大人が気を付けることは、なるだけ決めてしまわないで、子供たちが決めやすいきっかけを投げ掛けていくことです。これは、大人にとっては難しいことです。自分がやった方が早いし、楽ですから。でもその一方で子どもの育つチャンスをなくしてしまってはいないでしょうか。いつの時代も「最近の子供は～」と大人たちは言います。これを「最近の大人は～」って聞こえてこなければ、子供を取り巻く環境はいい方向に向かわないようにも感じます。子供たちは、無限大の可能性と才能を秘めています。それを私たち大人の考えで狭めていかないようにアンテナをはらなきゃと試行錯誤の毎日です。

今回もまさにそのことを確認するような事が起きました。当初発表は、子供たちだけに止めておく予定だったのですが、急遽保護者の方々に観ていただくことにしたのです。たった八時間で作ったのですから、観ていただくものになるはずもありませんし、子供たちがプレッシャーを感じてのびのびと表現できないのではと心配しました。また、私にすれば、このインスタント状態で観せるのはかなり勇気のいることです。しかし、この二日間、子供たちに言ってきました。「みんなの表現することに×はないよ。安心してやっていいよ」と。私も気持ちを切り替えて、保護者の方々に簡単なレクチャーをして、子供たちの発想を楽しんでいただきました。すると、ビックリしたことに子供たちは合わせたときより、大きな声でしっかりとしゃべって、みんなで何とか話をつないでいるのです。大したものです。初めて出会った友達と一緒に劇を作ったのですから、しかも八時間という短い時間で。出来上がった劇を観て保護者の皆さんはどんな風に感じたのでしょう。周りの大人の受け止め方で、子供たちの表現にまたいろんな影響があると思います。子供を伸ばす視点を忘れないでいることは、実は私たちが幸せになれるコツだなあと感じる昨今です。

（たむらちか／高知リトルプレイヤーズシアター運営指導）

司馬遼太郎さん逝ってもう十年

窪内隆起

平成八年（一九九六）二月十二日。作家・司馬遼太郎さんが七十三歳で亡くなった日である。ということは、来年で十年になる。

もうそれほどの年月が過ぎたのか。そんな感慨を持って書店に入ると、没後十年にちなんだ出版物が多く目につく。人気のほどを再認識した思いになる。思いはどうしても「あの頃」に遡ってゆく。

私にとっての「あの頃」というのは「竜馬がゆく」「坂の上の雲」が産経新聞（当時はサンケイ）に連載された時である。同社大阪本社文化部の記者として司馬さんを担当し、司馬さんから連載原稿を毎日受け取り、それを誤りなく掲載する作業に没頭した。

とくに「竜馬がゆく」は、司馬さんには最初の新聞連載小説であり、この作品の大成功によって、作家として大きく飛躍しただけに、担当者としても忘れ得ぬ期間である。

司馬さんの夫人福田みどりさんによれば、「〝竜馬がゆく〟と〝坂の上の雲〟の頃が最も充実していた時でした」。

つまり、絶頂期であったと言っておられる。その絶頂期に担当できたことは、本当に幸せだったと、今でもしみじみ思っている。「竜馬がゆく」は昭和三十七年（一九六二）六月から四十一年五月まで、三年十一カ月に亘って連載された。

絶頂期ということを証明するものとして、「竜馬がゆく」を連載中、他の新聞、雑誌に連載された作品が十七本もあるということが挙げられる。こんな作家は他に例を見ない。ちなみに、次の「坂の上の雲」の連載も約四年間だが、この期間中にも他へ連載された作品が十一本ある。まさに超人的と言える。

「竜馬がゆく」と併行して連載された十七本のうちに「功名が辻」があったことも懐かしい思い出となっている。昭和三十八年（一九六三）十月から四十年一月までの一年三カ月、他の新聞に連載された。

時期が同じだけに、「竜馬がゆく」はもちろん、「功名が辻」の内容の展開や、登場人物に寄せる作者としての思いを、折にふれて聞いた。

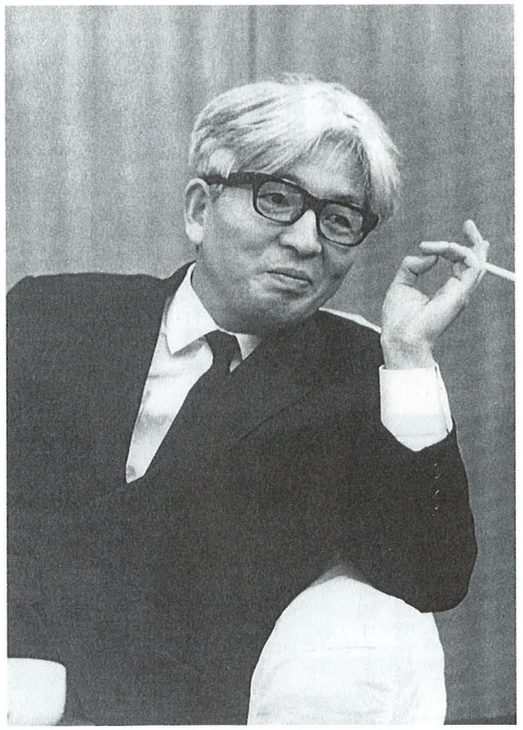
「功名が辻」が来年のNHK大河ドラマに決定、という報道を見た時は、四十年前にこの作品のことを伺った時の司馬さんの表情や口調までが、鮮明に甦ってきたことだった。

この作品は、山内一豊・千代夫妻が主人公、というよりも、千代夫人にウエートを置いた小説で、その機転、機略、思いやりといったものが主調になっている。時々私に、

「土佐生まれで土佐育ちの君には悪いけど、この作品に関して言えば、土佐はまあ付け足しや。土佐二十四万石を手に入れるまでの功名手柄ばなしやからな」

と言われたが、原作ではたしかにそうである。そのあとで、

「土佐に行ってからの山内一豊夫妻については、また日を改めて書くよ」



在りし日の司馬さん
昭和43年（1966）44歳の頃

と言われ、私もそれを心待ちにしていたが、ついにその機会が来ることなく逝かれた。

活字と映像というジャンルの違いもあり、大河ドラマではどう描かれるか、今から楽しみにしているところである。また、大河ドラマではないが「坂の上の雲」もNHKで放送される。放送時期は決まっていないが、これもまた楽しみである。

司馬さんはかねがね、作家としての年齢的な体力、気力、根気を理由に、「小説は六十歳まで」と言っておられたが、ほぼその年齢で「韃靼疾風録」を最後に、小説を終了した。

その後は「街道をゆく」（週刊朝日）「この国のかたち」（文芸春秋）「風塵抄」（産経新聞）などの文明論、文明時評を続けた。そういう文明論などは小説に匹敵するほどの分量があり、それによって〝日本とは〟〝日本人とは〟ということを考え続け、読者に問い続けた。

とくに、バブル景気に国中が狂奔した頃には、各種の執筆や対談を通じて、「日本はどうなる。このままでは日本は滅亡する」と、警鐘を乱打した。日本を思うその気持ちは、最後まで消えなかった。

亡くなった日、平成八年二月十二日の産経新聞朝刊には、絶筆となった「風塵抄」が載っている。バブル期に、日本中が〝気が狂ったように〟土地投機に奔ったことを取り上げ、それに対して政府も政党も無策であったことを嘆いている。これについては国民一人一人の反省が必要、と説き、最後に、

「……でなければ、日本国にあすはない」

と結んでいる。迫力充分の絶筆である。司馬さんが今この世に在れば、日本をどのように評されるであろうか。

司馬さんの作品や仕事ぶりについては、実に多くの人が書いており、百冊はある。「ああそうだったなあ」と思うこともあれば、また「こうは言っていなかったがなあ」と思うこともあるが、いずれにしても、これだけ多くの人に書かれるということはすごい、と思うばかりである。

そういう色々な思い出の中で、私にとって忘れ得ぬ司馬さんの恩情がある。

昭和四十四年（一九六九）二月、私は父の怪我のため、産経新聞社を退職して高知に帰ることを決め、東大阪市の司馬さんのお宅に伺って、そのことを報告した。その時、

「今までの仕事捨てるの惜しいよ。何かいい方法ないか、もっと考えてみようよ」

と言われ、一週間ほど考えたが打開策がなく、そのことを伝えにお宅へ伺った。

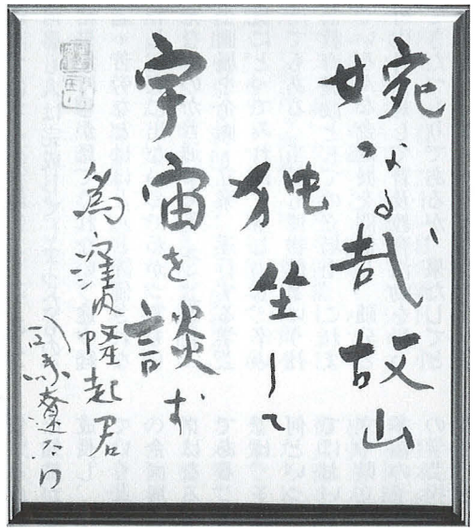
「やっぱりあかんのか。どうしても駄目か」

何度も言われ、餞別として、筆でサイン入りの「竜馬がゆく」全五冊と色紙を頂いた。

色紙には、

「婉なる哉故山　独座して宇宙を談ず」

とあった。色紙については、



司馬さんから餞別に頂いた色紙

「〝宇宙を談ず〟は、まあこせこせせずに生きて行こうや、という気持ちで書いた」

と笑顔で言われた。帰る時には、みどり夫人からウィスキーを渡された。

その翌朝のことである。出社するとすぐ、司馬さんから電話があった。

「なんとかならんのかいな。やっぱり文化部の仕事捨てるの惜しいよ。ひと晩考えたんやけど、お父さん大阪の病院に入院してもろたらどうや。そしたら君も会社やめずに仕事続けられるやろ。僕でよかったら高知まで行ってお父さんにお願いしてあげるよって」

どこまで情の厚い方であろうかと、受話器を握ったまま、感激で身体が震えた。

身動きもとれぬほど多忙な司馬さんに、高知まで行って頂くことなど到底出来ないことが判るので、私はすぐにお宅へ走り、ご厚情だけを有難く頂く挨拶をした。

もう三十六年も前に受けた恩情が、年を経るに従って鮮明度を増してゆくのである。

（くぼうちたかおき／元産経新聞司馬遼太郎担当記者）

学芸員シリーズ⑬

学芸員にとって企画展とは

安井敏夫

博物館や美術館、資料館等の文化施設（以下「博物館」という。）の大きな事業・イベントとして、「企画展」がある。県内唯一の純然たる公立の自然系博物館である当館では、博物館活動の一つとしてこれまで年間大小計四～五件の企画展を開催してきた。企画展には、いろんな手法で行うものがあるが、何れにしても、そのための準備は一大仕事であり大変である。特に、当館のような町立の博物館で学芸員が一人しかいない施設では、その苦労も一入である。何事も人は完成してしまったもの、結果だけしか見てくれない。途中経過・苦労などはほとんど評価されないし、表に出ないのでわかってもらえないのが普通である。そこがまた、企画展を企画・立案、遂行する学芸員にとってみれば、空しいし、辛い所でもある。当館も博物館という社会教育施設としての立場上、これまでいろんな企画展を開催し、随分と町内外に対して普及教育活動を行ってきたつもりであるが、果たしてどれだけの人間が、学芸員の苦労・努力を理解し、結果を評価してくれているのか……。

企画展を開催するに当たっては、いろんな苦労・悩みを伴うが、企画展のテーマも頭を痛める要因の一つである。その場合、できるだけその時期・時代に即した話題をテーマにしたタイムリーな催しをやるように心がけている。特に、地域の博物館として、地方色のあるものや地元と関連性のあるものを優先的にテーマに選ぶようにしている。尤も、一方では、自然系の博物館、自分の専門分野とは全く畑違いの企画展〔陶芸・絵画・写真・文学など〕を開催したこともあり、実に多岐に亘っている。逆にその点、一つ一つの企画展を開催する度に自分の専門以外のいろんな知識が増え、自分自身が少しずつ成長し、幅広い人間・学芸員に育っていくというメリットもある。

企画展を開催する上でさらにネックになるのが、スタッフの数と予算である。当館のような町立の博物館では、予算も時間も制約があるし、何といっても一人の学芸員ではすべてにおいて限界がある。とても、市立や県立の博物館が開催するような多額の予算と長期の準備期間、複数の学芸担当者による大規模な企画展には、展示品目、入館者数等すべてにおいて比較にならない。ただ、当館では、小規模なりに内容を幅広く充実し、自ら考え解決する「Q&A」を設けるなど親しみやすく楽しい催しにしてきたつもりである。

企画展の中でも、夏休み期間中の企画展の準備は、暑さとの闘いでもある。特に、解説パネルの原稿の作成・校正等は神経を使い、オープンぎりぎりの夜遅くまで準備に追われる。当然のことながら、企画展の開催だけが学芸員の仕事ではない。毎月の町の広報、年二回発行の広報誌等の広報活動、夏休みの教室や友の会の行事の準備等（これについては館の他の職員の協力が大きい）いろんな仕事も同時にこなさなくてはならない。ひどい時は、館主催の企画展を同時進行で進めた時もあった。平成十六年に開催した夏の「仁淀川の自然展」、秋の「南海地震展」はその例である。この時ばかりは猛暑の所為もありいささか心身に応え、しばらく体調不良の状態が続いたことだった。ただ、学芸員として、来るべき地震による被害を少しでも軽減できる手助けとなるよう地域のために何としてでも「南海地震展」をやっておく必要がある、という思い・使命感のようなものがあったからこそできたことである。

毎度のことであるが、企画展が終わって期間中を振り返ってみると、子どもたちを始め、いろんな人との楽しく、感動的な出会いや想い出もでき、また、会場に備え付けの芳名帳に記された観覧者の有難い感想に励まされることも多く、その時初めて、「ああ、辛かったがやはりやって良かった……」という実感が込み上げてきて、次への活力となる。

ながらへばまたこのごろやしのばれむ
憂しと見し世ぞ今は恋しき
〔藤原清輔朝臣〕

（やすいとしお／越知町立横倉山自然の森博物館副館長兼学芸員）

高知市文化プラザ かるぽーと 8～9月の事業のご報告

◆高知市文化体験プログラム

子供たちが、さまざまな文化に触れ、専門性・芸術性に富んだ文化体験をしてもらうプログラムで、今年で三年目を迎えます。

◇劇で遊ぼう！

県内で子供ミュージカルの企画・制作・演出に当たっている田村千賀さんをメイン講師に、八月二十五日、二十六日の二日間、小ホールにおいて、小中学生の演劇ワークショップを行いました。『びっくり島の冒険』と銘うち、二つの班に分かれて、子どもたちの自由な発想で自分たちが考える〝びっくり島〟を作ってもらいました。二日目は自分たちで考えたストーリーをもとに発表会を行い、不完全ではあるけれど、自分の表現がしっかりできていることに、観客である保護者の方々も驚くと同時に、大変喜んでいました。

◇ヴォイス・トレーニングに挑戦！

九月十七日には大講義室で中高生ヴォーカル・ワークショップを開催しました。東京でヴォーカル・スタジオを主宰し、ヴォイス・トレーナーとして活躍している西村入道さん・八重子さんによる指導で、からだのリラックスの方法を学び、発声練習・リズムの取り方など歌を上手に歌うコツを伝授してもらいました。

◆演劇ワークショップ2005
自分の軸が見つかれば声も変わる～身体は手入れ次第の楽器～

八月二十日、二十一日の両日、小ホールにおいて、演劇ワークショップ「身体・声編」と「演奏・パフォーマンス編」の二講座を開催しました。「身体・声編」は、〝身体の声を聴く〟をテーマに、高知出身で、現在は東京で劇団「ポかリン記憶舎」を主宰している明神慈（やす）さんを講師に招きました。知らないうちに凝り固まっている身体を〝座骨歩き〟〝フラフープ騎馬戦〟などでほぐしていきました。二日目もユニークなメニューをこなして、最後にグループに分かれて短い発表作品を披露して終了しました。

また、〝演奏・パフォーマンス編〟は、作曲家、木並和彦さんを講師に、音の出るものを楽器として、自由な演奏や、グループ演奏を行い、音と表現を楽しみました。

◆フラメンコ曽根崎心中

九月十三日、大ホールで「フラメンコ曽根崎心中」を上演しました。

近松門左衛門の代表作「曽根崎心中」をフラメンコで表現した舞踏劇で、全編日本語の曲をフラメンコで歌い、踊る、史上初の舞台。昨年はフラメンコ発祥の地スペインのヘレスでも上演され、本場の観衆をうならせた舞台の待望の高知公演です。

日本のフラメンコの第一線で活躍する舞踊家であり振付家の、鍵田真由美さんがお初を、佐藤浩希さんが徳兵衛を熱演。鍛えぬかれたダンサーたちによる迫力ある群舞も見応え充分で、また、高知出身の黒田月水さん奏でる土佐琵琶をはじめ、篠笛、和太鼓とフラメンコギター、日本語のカンテなど和洋が見事に一体となった音楽が、観客の魂を揺さぶりました。

最後には折り重なって果て、思いを成就したお初と徳兵衛に、会場からも大きな喝采が送られました。

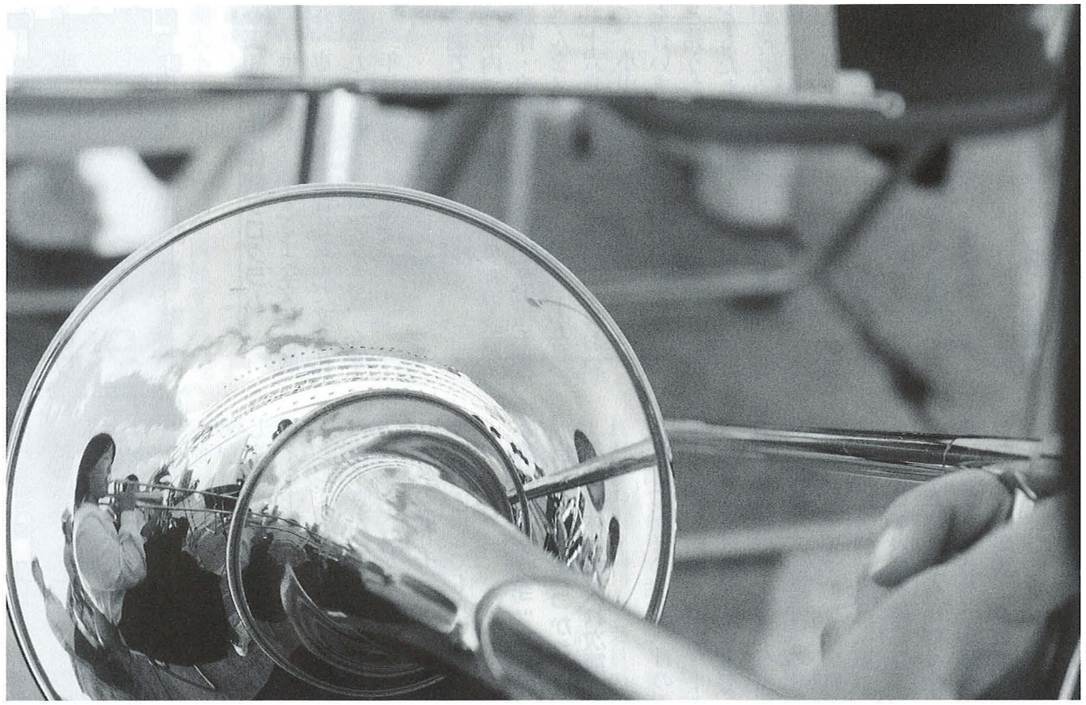
上演後、この公演のプロデュース・作詞担当の阿木燿子さん、音楽監修・作曲担当の宇崎竜童さんご夫妻も登場。宇崎さんは主題歌を披露し、会場は大いに盛り上がりました。

◆CLAMP四（su）展

七月一日～九月二十五日、横山隆一記念まんが館で、企画展「CLAMP四　創作の秘密～a secret of creation～」を開催しました。

女性四人によるまんが創作集団・CLAMPのカラー原画を中心に展示した本展では、できるだけ多くの作品をご覧いただくために、Ⅰ～Ⅲ期に分けて開催、期ごとにほとんどすべての作品の展示替えを行いました。三期とも訪れる人もあり、合わせて五千六百四十六人の来場がありました。親子で楽しむファンも多く、「貴重な原画が観られて良かった」「またやってほしい」など、ご好評いただきました。

八月七日には関連イベントとして「CLAMPトークショー&サイン会」を開催。先着二百名限定のサイン会は瞬く間に定員に達しました。トークショーにも八百六十三人が訪れ、映像を交えて語られる創作の秘密に聞き入っていました。



高知を撮る
第21回写真コンテスト入賞作品

巨大な客船

（平成16年　あしずり港）

山田　開久

豪華客船飛鳥があしずり港に寄港した際、清水中学校吹奏楽部によるセレモニーです。

今年、早明浦ダムが三度マスコミの話題に上った。二度は、貯水率0%になったニュースで、これに近い渇水は近年珍しくないので、読者は「またか」と思ったに違いない。

地元では常識であるが、早明浦ダムは高知県にあり、その水を主に使うのは、徳島県や香川県である。でも、遠くの人にとっては、「四国は一つ」である。電話や手紙で「水がなくて大変でしょう」などと見舞われると複雑な気持ちになる。

新聞が大きく扱い、地元でも驚いたのは、三度目の話題、つまり、台風14号に伴う雨で、早明浦ダムが一夜にして満杯になったことである。考えただけでも恐ろしい降水量である。満水になった水は、安全のため、景気よく放水される。一部は利用されるとしても、大半は海に捨てられる。

「水は貴重品だ」という考えは広く浸透してきた。昨今は「湯水のように」という言葉はあまり使われない。試験でこの言葉に続く語句を選ばせたら、「使う」でなくて、「大切にする」を選ぶ者もいるに違いない。

高知市の年間降水量は約二七〇〇ミリ、県庁所在地では日本一で、水は、太陽光と並んで、高知県の貴重な資源である。むざむざと海に捨てるには、あまりにも惜しい。砂金を海にばらまいているようなものである。

一方、海の彼方には、石油はあるが水はない、という国は多い。石油と水をうまく交換できれば、お互いに助かるはずである。奇抜なアイデアが出番を待っている。

問題は貯水と輸送である。さしあたって、浄水、貯水設備のための広大な土地、そこから水を港に送るパイプラインが必要になる。さらに、行きは水、帰りは原油を、双方の品質を落とさずに輸送できるタンカーやコンテナーも開発しなくてはなるまい。

この事業がうまく進むと、高知県はたちまち富裕県になる。無料（ただ）の原料を使って金儲けすることをためらう必要はない。石油も同じである。これが本当の「水商売」である。

（路）

水商売

風俗歳時記

高知遺産

The Kochi Heritage 2005

がんばれとでん！

今年百年目を迎える、いまや日本で最も古い路面電車、とでん。広告電車はなぜか嫌われることが多いが、意外に「色味」に乏しい高知ではちょっとしたスパイス。他都市では「路面電車」の価値が見直されているが、無計画な道路など都市基盤整備のあおりを食らい、高知ではいまだにその価値が低いままなのが悔しい。

（竹村直也）

MUSEUM SHOP
Kochi-City Culture Plaza CUL-PORT

Original goods
Artist goods
Ticket

かるぽーとミュージアムショップでは、横山隆一記念まんが館オリジナルグッズをはじめ、県内で活動を続けている作家の作品展示・販売、県下の文化施設で行われる様々なイベントのチケットを取り扱っています。

〒780-8529 高知市九反田２－１
高知市文化プラザかるぽーと３階
Tel 088-883-5052
毎週月曜休業（祝休日の場合は営業）
営業時間 10:00～18:00

今号の表紙

「overflowed sunrise」　土方佐代香

ビルの奥から溢れ出す光。押し出されるように始まる今日。まだ何一つとして片付いてはいない昨日。その光が、否応なしに区切りをつける。新しい日を待ち望む人にも、昨日を終わらせることができない人にも、毎日の違いを見失った人にも、すべての人に等しく訪れるこの時間の贈り物を、眩しく、優しく、悲しく、切なく、そして、美しいと思う。

（ひじかたさよか／高知大学大学院教育学研究科美術教育専修２年）

風俗

ふるさと

うさぎ追いし　かの山
こぶな釣りし　かの川

誰もが歌う故郷を恋うる唄だが、その変わりようには目を覆うものがある。

秋彼岸の一日、墓参りのため、久し振りに田舎の集落を訪れてみたが、人影が無い。道路だけは黒々と舗装されているのだが、たまに出会う人は老人ばかり。聞けば限界集落に組み入れられ、あと十年もすれば住んでいる者は居なくなるとか。

最盛期には八千人を数えた村だったが、今は二千人あまりだという。山へ入ろうにも道が無い。人手不足で手入れのされない山道は、土砂崩れと蔓や雑草の繁茂で入れないのだ。川へ降りる道も同様、藪を刈り分けて進もうとしたが、何故か大量に増えたハメ（マムシ）には要注意、と言われる始末。

無原則に植えられた植林が伐採期を迎え、軒先まで聳えた木々の梢で集落は薄暗い感じ。かつては全山を埋めていたトウモロコシ、麦、大豆、小豆、そば、甘藷、といった作物は見当たらない。そんなものを栽培しても、経営が成り立たないのだ。それに加えて家の傍らまで降りてくる猪や野猿の横行で、何を作っても食べられてしまい、庭先のトタン板で囲った野菜畑を守るだけで精一杯らしい。

戦後六十年を経て、便利でキレイな暮らしを手に入れた私たちだが、故郷を失ったのは確かな事実だ。自分本位さばかり目に付き、隣は何をする人ぞ、といった街の暮らしに慣れてしまったが、ほろほろ酔うと「うさぎ追いし　かの山」と口ずさんでしまうのもまた事実である。

（3）

文化高知 No.128 2005年(平成17年)11月1日発行 [隔月発行]

Music Stream 2005

ミュージックストリーム2005

合唱＆吹奏楽

本公演は、合唱及び吹奏楽の県内アマチュアトップ団体による演奏会です。合唱の美しさと吹奏楽の圧倒的な迫力をお楽しみください。

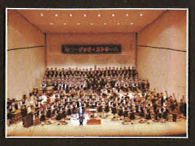
2005年11月5日(土)
高知市文化プラザ大ホール

開　場／18:00　開演／18:30～20:30
入場料　一般:1,200円(当日1,500円)
　　学生:　800円(当日1,000円)

この1年、四国・全国において活躍した地元高知の音楽団体が"かるぽーと"に集結！
実力ある県内音楽団体の熱い演奏をお聴きください！

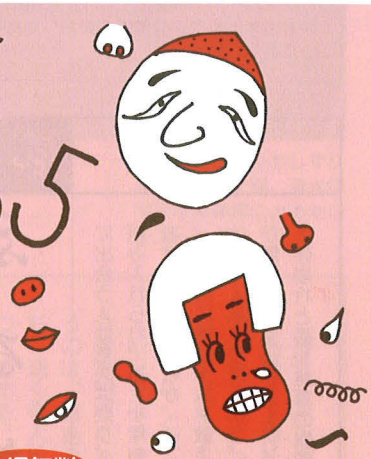
[出演]
- 高知県立丸の内高等学校音楽科（全日本合唱コンクール四国支部大会金賞受賞）
- 土佐女子中学校コーラス部（全日本合唱コンクール四国支部大会金賞受賞：四国支部代表）
- 土佐女子高等学校コーラス部（全日本合唱コンクール四国支部大会金賞受賞：四国支部代表）
- 鏡野吹奏楽団（全日本吹奏楽コンクール四国支部大会金賞受賞：四国支部代表）

[ゲスト]
- 愛媛県立伊予高等学校吹奏楽部（全日本吹奏楽コンクール四国支部大会金賞受賞：四国支部代表）



高知市文化体験プログラム支援事業

本とあそぼう2005



本を読むのは楽しい、読んでもらうともっと楽しい、
自分で作るともっと、もっと楽しい!!

1 本の企画展「おいしい本、み～つけた!!」 11:00～16:00
2 かるぽーと おはなし会 ①11:00～11:30 ②13:00～13:30
3 ワークショップ「顔・かお・ヘンな顔」 13:30～15:30 (要申込み)

入場無料

平成17年11月13日(日)11時～16時　高知市文化プラザ(かるぽーと)小ホール

美術作品コンクール

Concours des Tableaux

翔け 若き芸術家たち

対　　象：平面作品（壁面にかけられるもの）。書、写真は対象外。
資　　格：県内在住あるいは県出身者で18歳以上35歳未満の個人(H17.4.1現在)
作品搬入：平成18年1月7日(土)・8日(日)　※事前の書類申込み要
審　　査：平成18年1月15日(日)　※作品の選考は公開審査
審 査 員：鍵岡　正謹　氏（高知県立美術館顧問）
賞　　：最優秀作1点賞金30万円・市民ギャラリーでの個展、
　　優秀作2点賞金各5万円。

※詳しくは募集要項・専用申込用紙をご覧ください。

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5011(代表)／郵便振替01680-5-14869
http://www.bunkaplaza.or.jp　E-mail bunshin@i-kochi.or.jp